

白山ふるさと文学賞

第六回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

## 二人の少女

笠間中学校二年

大井川 おおいがわ

翔子 しょうこ

あの時のことを今でも私は忘れられない。夕飯を食べ、本の続きを読もうとした時。

突然目の前が真っ暗になって、神様は私から光を奪った。そして本を読む楽しみも、私は本を読むことが一番好きだった。なのに。

手術をしてなんとか片方：右目は少し見えるようになった。左目はもう回復の見込みがないと言われた。右目もこれ以上の回復は望めなかった。右目の視力は零・零五。これからも本を読み続ければもっと悪くなり、また失明する。今度こそもう治らない。必要最低限、使うとも言われた。

学校は：中退した。こんな状態で行っても同情されるだけだし、迷惑もかけてしまう。そんなんじゃないや楽しくない。

どこに行くにしても私は一人で歩けない。そんな私を母は失明する前と同じように図書館に連れて行ってくれた。わざわざ係員に聞いてまで点字で書いてある本を持ってきてくれたり本を読んでもくれたりした。点字は失明する前に何となく覚えていた。点字が事件解明に繋がる重要な鍵だった本があったから。

失明したおかげか、私の聴力は異常に良くなった。誰かが内緒話をしているとも聞こえてしまう。だから図書館の係員さん達が私達を

「また来てるわよ、あの母親。娘の方は学校とか行つてないのかしらねえ？」

「そうねえ。ずっと喋ってるし…。他のお客様から苦情がきたらどうしましょう」

「それは…退館してもらうしかないわね」

と言っているのも知っている。それを承知で私達が図書館に来ていることを彼女達は知らない。

ある日、いつも通り母と図書館に行き、母が選んだ本を聞いていると係員の囁き声が聞こえた。おおかたまた私達の話だろうと思っただけで最近慣れてきたのか彼女らは私達を一般の客同様に扱っている。悪口や

ひそひそ話も全くとは言えないけれどなくなった。なのに今更、言うのはおかしい。

不思議に思つて少し感覚を研ぎ澄ますと母の声が右耳から、係員の声が左耳から入ってきた。右側を向いて自分の唇に左手の人差し指をあてると、聞こえてくる声は係員のものだけになった。

「あの女の子…、私達が話しかけてもずっと無視してくるのだけだ」

「感じ悪いわねえ。しかも急に大きな声で話しかけてくるし…」

「他のお客様の迷惑にならないといいけど」

女の子？私のことではないことは分かる。内容からもそうだけど、噂話をする時、人は無意識にその相手の人の方を向いてしまう。母に聞けば係員の人達が私のことを見ていないのは一目瞭然だった。

私は母に支えてもらいながら、彼女らの視線の先へと向かった。彼女らの話でその女の子がどんな子なのかが大体予想はついたが、憶測のまま話しても信じてもらえないと思つたからだ。

「いたよ、芽唯。多分、この子よ」

母は私に言った。あの子と言わずこの子と言つたことから結構近くに

いる事が分かる。

私は右目をそっと開けた。確かにその女の子は近くにいた。視力の悪い私にも顔が判るくらい。

その女の子は私と同じくらいの年齢だ。けれど私より五センチ程身長が高かった。私も年の割には高いはずなのに、それより高いとなると、高校生くらいにも見える。

横顔だけど、顔立ちはとても大人っぽかった。それでも私が中学生だと思つたのは、彼女がこの図書館の近くの中学の制服を着ていたから。

耳を見ると…やっぱり！

「お母さん、ありがとう。悪いんだけど、次は係員さんのところへ行くてくれる？」

「いいよ」

カウンターのの方に戻るとまだ係員の人達はあの女の子のことを話していた。

「感じ悪い子ね。どういう教育をされているのかしら」

「ホント。無視するなんてねえ」

しかも悪口がパワーアップしている。放っておいたら退館させられてしまうかもしれない。

「あの…」

私は声のする方に向かって恐る恐る言う。

「あの子は多分、耳が聞こえないんです。ほら、よく見ると補聴器をつけてるでしょう。だから彼女に小声で声をかけても補聴器が声をくみ取れなかったんだと思います」

「あらそうなの。それなら仕方ないわね」

奥の方にいる係員も同じようなセリフを呟いている。よかった。誤解は解けたみたい。

「事情は分かったけど、じゃあどうやってあの子と会話しましょう。私達、手話なんてできないわよ」

左側からまた違う声が聞こえてきた。その意見に同調する声が広がる。さすがにそこまでは考えてなかった。誤解が解ければそれでいいと思ってたし。

心の中で慌てていると後ろから母の穏やかな声が聞こえてきた。

「別に手話を使えなくても、紙か何かに伝えたいことを書いて、彼女に見せればよくないでしょうか。それなら伝わりますよ」

「あ、なるほど」

ありがとう、の意味で右目を開き、母の顔を見た。すると母の手が優しくポンと私の肩を叩いた。どういたしまして、と。

本をかりてもらい図書館を出てしばらく歩くと、後ろからこちらに向かってくる足音が聞こえた。母が振り向く気配がする。

「あの…」

足音と声の主を母が私の耳元で囁いた。

「芽唯、あの子よ。貴女が図書館で庇った、補聴器をつけている女の子」それを聞いて、私も思わず振り返った。振り返ったところで見えるわけでもないのに。

「どうしたの、お嬢さん。私達に何か？」

母がなるべく大きい声で言った。きっと彼女が補聴器をつけていることを気づいたのでだろう。彼女のまだ荒い息づかいが聞こえる。

「さっき私のこと庇ってくれたの、お二人ですよね？ありがとうございますました！」

バツと彼女が頭を下げたらしく、彼女の長くて柔らかい髪の毛が私の頬に当たった。

「ホントは分かってたんです。係員の人達が私の悪口を言ってること。けれど話しかければまた疎ましいと思われると考えると…」

図書館で彼女の悪口を聞いたとき、私と同じだと思った。だからこそ彼女を庇った。今はどうすればいいんだろう。

迷ったあげくに私は彼女の気配がする方に向かって、無表情で言った。「だから何？」

えっと小さく息を呑む音が聞こえる。気づかないフリをして、私は続ける。

「疎ましがられるから何？今回は私が庇ったけど、いつでもどこでも誰かが庇ってくれると思うな。ハンデを背負った状態の今が自分の普通の状態なんだ。ハンデすら、自分の武器にするくらいの気概を持って」

彼女は同情してほしいわけじゃない。それはすぐに分かった。私もだったから。けれどどうしてほしいかは自分でも分からない。

私の時は母が言葉ではなく行動で表してくれた。でも時々私は思う。あの時、私が一步を踏み出すために叱ってくれば良かったんじゃないかって。まあそれは今だから言えることなのかもしれないけど。

だから私は彼女に厳しい言葉をかける。私がしてほしかったことをす

る。

呆然としているだろう彼女に背を向け、私は歩き始めた。約一ヶ月この道を通い続けている。どこにどんな障害物があるかはもう覚えてしまった。通行人は気配で分かる。

後ろから母の声が聞こえた。

「ごめんなさいねえ。あの子も貴女のように図書館の人に疎ましがられてたの。だから貴女の悪口を聞いて耐えられなかったのよ」

「どうして彼女は疎ましがられたのですか？見たところ普通の女の子なのに」

彼女の不思議そうな声も聞こえる。初めて会った人達は皆、そう言う。

「あの子、失明したのよ。右目は手術して何とか景色が見えるくらいの視力で、左目はもう全く見えない。本が大好きだったのに」

「そうなんですか…」

彼女の哀れみを含んだ声が胸に突き刺さった。今私が一番嫌いなものは同情だから。

「じゃあ、もう行くわね」

母が彼女に言った。次に彼女が、母に何か言ったようだけど、それは聞こえなかった。

やがて少し騒がしい足音がどんどん大きくなってきた。私は振り返る。

「ごめんなさいね。遅くなって」

「別にいいよ。あの子と話してたんで…」

言葉が途中で止まってしまった。母の隣にもう一人の気配があったから。

「あいつ。私、大石観月つています。貴女は？」

前髪で隠れ気味の右目をそっと開いて彼女を見ると、彼女…観月は微笑んでいた。

自分と同じ、ハンデを持つ少女…。

馴れ合えない部分もあるだろう。でもそんなことも何かに繋がるかも

しれない。

何より、同情せずに無邪気に笑ってくれる彼女と自分が、友達になりたかった。

私は息を吸うと、彼女にも聞こえるくらいの声で自分の名前を告げた。すると彼女はさっきよりも明るく笑った。

